**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第３３回　（２０１７年　０５月０９日）**

**・第３３回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」８頁**

・📖 （読む）「師と弟子」　８頁下段Ｌ５～８

*みなとともに―妻子や父母とともに生活して彼らに仕えるがよい。お前にとって非常に親密な人びとであるかのように彼らを扱え。しかし心の奥底では彼らは自分のものではない、ということをわきまえていなさい。*

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナは、さまざまな例をつかって同じことの説明を何回もしています。なぜなら一度聞いただけでは我々の印象にあまり残らないからです。ですので、お母さんが小さな子供に何度も同じことを言って聞かせるように、何度も繰り返し説明しています。　そして例を使う目的は、①分かりやすいことと、②覚えやすいからです。

**道徳的になるための実践と、霊的になるための実践の違い**

**（１）道徳的になるための実践**

我々は、なにが道徳的でなにが非道徳的かを、お母さん、お父さん、先生、本などから学びますね。道徳的なものも実践が難しいです。例えば「傷つけない」「嘘を言わない」は、どれくらい実践が大変か分かりますね。

**ⓐ　道徳的になるための実践はほとんどの場合、抑制だけで十分です。**

**ⓑ　道徳的になるための実践の目的は、①社会のために道徳的になる。なぜならみんなが欲張ると社会は成り立ちませんから。　それと②非道徳的になりますと、後で自分が困るからそうならないようにするためです。③ふつうの幸せを得るためです。**

**ⓒ　道徳的になるという目的のためには、知識はあまり関係ありません。**

**（２）霊的になるための実践**

霊的になるための実践は道徳的になるための実践よりも、さらに難しいです。なぜなら

**ふだん自然に我々が行っていることの反対のことをしないといけない**からです。

例えば、人間関係などで執着は自然に出ています。その執着を抑制する。

また、例えば感覚の例を言います。

◎舌は美味しいものを食べたい　　◎目は美しいものを見たい

◎耳は美しい音を聞きたい。　　　◎皮膚は触りたい

ですね。これらの感覚を抑制するのは難しいです。だけではなく、

**我々のいつも外を向いている感覚を、反対に中に向けなければいけない。**

いつもと反対のことをする、つまり自然に出る欲望や執着を抑制するのは難しいです。それだけでなく、道徳的な実践では抑制するだけでかまいませんが、

**ⓐ´霊的になるための実践では、欲望や執着を取り除かなければななりません。**

道徳的よりもっと深いです。

例えば、道徳的実践では「欲張る」という感情はコントロールするだけで大丈夫です。しかし霊的実践では「欲張る」と言う感情自体を取り除かなければならない。

例えば、自分の家族を愛する。それは非道徳ではないので、道徳的にはオーケーです。しかし霊的実践では、「愛しても執着がでないように気をつける」ことが大事です。

ではどうして霊的実践では取り除かなければならないのでしょうか？　なぜなら

**ⓑ´霊的になるための実践の目的は、とてもきれいになる、永遠な幸せ、永遠な穏やかさ、永遠の平安を得ること**

だからです。

**ⓒ´霊的になるための実践の場合、知識が関係あります。絶対の知識**

そしてその目的は、一番高いものを得ることです。例えば、絶対の真理、絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福、一番高いですね

バガヴァッド・ギーターにもありますね。サマーディの結果で一番高いものを得られます。苦しみも影響なし、それが一番高いものです。

**一番高いものが目的ですから、実践も難しいです。難しいですからシュリー・ラーマクリシュナ は何回も同じことを言っています。**

**『福音』は家住者のための聖典**

シュリー・ラーマクリシュナには家住者の信者がいっぱいいました。『福音』は、本当は家住者のため聖典です。お坊さんのためには、別の助言があります。もっともっと厳しいです。そのことは『福音』の中にはあまりないですね。

シュリー・ラーマクリシュナの『福音』の中での家住者への助言は、

◎すべての仕事をしてください。

◎人間関係も大事です。家族のお世話もしてください。

◎ですけれども識別もしてください

「我々の人間関係は永遠ではありません。神様と私の関係だけが永遠です」ということを。

お釈迦様はすべてを放棄してお坊さん、尼さんになることを強調しましたが、シュリー・ラーマクリシュナはそこまでは言いませんでした。

永遠な関係は神様との関係だけ。そして神様のことをいつも思い出してください。そのことを例を使って説明しています。読んでください。

・📖 （読む）「師と弟子」　８頁下段Ｌ９～１４

*金持ちの家のお手伝いは、その家の中の仕事を全部する。しかし彼女の思いはつねに、故郷の村の自分の家の上にある。彼女は主家の子供たちを、まるで自分の子であるかのように育てる。彼らのことを『私のラーム』とか『私のハリ』と言いさえもする。しかし心の中では、彼らは決して自分のものではない、ということをよく知っているのだ。*

（解説）

インドでは昔ほどではありませんが、大家族です。そして昔は機械に頼らずにすべて手作業で家事をしていましたので、主婦一人では家事をこなせませんでしたね。ですので赤ちゃんが生まれたら女性の召使いを雇って赤ちゃんの面倒をみてもらいました。そのときその召使は赤ちゃんの名前ラームやハリを「私のラーム」「私のハリ」などと愛情を込めて呼びます。インドでは神様の名前を人につけますから、この場合のラームやハリは赤ちゃんのことです。例えばブラフマーナンダジのお坊さんになる前の名前は「ラカル」ですね。ラカルはシュリー・クリシュナの友達です。アベダーナンダジのもとの名前はカーリープラサードですね。マザー・カーリーのことです。サーラダー・プラサンナ（スワーミー・トリグナティターナンダ）のサーラダーは弁天様のことです。

**我々の家族は、本当は神様の家族　　（召使いの例）**

女性の召使いはお金持ちの家族のためにすべての仕事をします。そのうちのひとつが子供を育てることです。主人の子供です。自分の息子、娘ではない。彼女は愛情をこめて主人の子供をお世話し育てます。仕事のためだけでなく本当に愛しています。ですけれども本当は心の中では田舎にいる自分の家族のことを思っています。１秒も忘れない。金持ちに雇われている召使いは、もし、金持ちに仕事をクビにされますと、主人の子供と自分の関係は終わることを知っています。

召使いが金持ちの家族を「これは私の家族ではない、ご主人様の家族です。私はご主人様の家族の面倒をみています」と考えているように、もし我々が自分の家族を

**「これは私の家族ではない、神様の家族です。私は神様のために神様の家族の面倒をみています」**ということが理解できれば実践はすぐにできます。そうしないとイメージが出ませんから。なぜなら自分の家族、私の息子、娘、旦那さん、奥さんですが、別のイメージが大事です。

**「私は世話人です。神様は、私が面倒をみるためにその仕事を私に与えました」**

そう考えないと全然実践できないですね。

サンスクリット語でも世話をセワと言います。同じですね。

・📖 （読む）「師と弟子」　８頁下段Ｌ１５～１８

*カメは水中を動き回る。しかし、彼女の思いがどこにあるか察することができるか。岸辺の、自分の卵が産みつけてあるところにあるのだ。この世のすべての義務を果たせ。しかし心は神を思いつづけなさい。*

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナはすごい観察力をしていました。カメの例もシュリー・ラーマクリシュナのオリジナルです。ときどきヒンドゥ教の聖典、物語、叙事詩から例を引用することもありましたが、オリジナルもいっぱいあります。今では皆さんが使っている例の中にシュリー・ラーマクリシュナのオリジナルのものがたくさんあります。

**心のある部分でいつも神様を思う　（カメの例）**

川のカメは水中に住んでいますが、産卵の時は土手の砂場に穴を掘ってそこに卵を産んで、その上から砂をかけて卵を隠します。カメはそのまま川に戻りますが、心はいつも卵のことを思いだしています。

そのように我々が仕事をするときいつもある部分で神様のことを考えてください。ふつう、皆さんは心の100%で仕事をしたり人を愛したりしますね。そうしますと執着が出てあとで困ります。

ですので、心のある部分でいつも神様のことを考えていてください。最初は少ない部分でかまいません。少しずつふやして2%、3%、10%，40%，50%、というふうにレベルアップしていきます。　それはできますね。なぜなら、我々は愛を分けていますね。ある一人の人だけを心の100%で愛しているのではありません。　100%旦那さん、100％奥さん、100%息子ではないでしょ。それで愛を分けています。それと同じです。愛のある部分を神様に分けてください。少しずつ神様への愛を増やしていって、

**神様への愛を最終的には100%にしてください**。

我々には執着がありますから、神様を愛することで旦那さんへの愛が減るのはイヤだ。それが心配で助言を聞きたくないと考えるかもしれない。しかし愛は無限です。神様を30%愛したからといって旦那さんへの愛が30%減るわけではありません。

もし神様と、息子、娘、奥さん、旦那さんが別の存在だと考えると、100%神様を愛するというのは、矛盾が出ますね。しかし、**息子や娘の中に神様がいると考えてください。**そしてそれをお世話すると考えると矛盾は出ないですね。非論理的ではないでしょ。そう理解しますと、矛盾も恐怖もなくなります。神様は遍在ですから絶対に我々の中にも、旦那さん、奥さん、親戚の中にも同じ神様がいます。問題は理解していないことです。それで混乱や矛盾を感じるのです。そのために聖典の勉強が必要です。最初は頭で理解してください。そして実践しますと大丈夫です。

・📖 （読む）「師と弟子」　８頁下段Ｌ１９～２２

*もしお前が神への愛を養わないで、いきなり世間に入るなら、お前は次第に深く巻き込まれるだろう。それへの危険、それへの苦悩、それへの悲哀に圧倒されるだろう。そして世間の物事を思えば思うほど、それらに深く執着するようになるだろう。*

（解説）

これが結果です。他に選択肢はありません。神様への愛を養うという実践は絶対にしなければならない。　もし心の100%で仕事をし、人を愛しますと何が問題か、それが書かれています。どうして心のある部分で神様のこと、神様の存在を考えないといけないかが書かれています。

**「神様をつねに思うこと」を盾として自分を守る**

人生経験の浅い人、例えば若い、まだ結婚していない、子供がいない、仕事をしていない、という人には、家族を持ったり、仕事をすることがどれくらい大変か分かりません。絶対に大変なことや問題が出ます。みんな、が欲しい。危険や大変な状態、苦しみ、悲しみは欲しくないですね。しかし人間関係や、病気、お金がなくなる、歳をとる、など苦しみ、悲しみの機会は絶対にあります。避けたいけれども避けることができません。そのことを絶対覚えておいてください。

そしてそれに立ち向かわないといけない。どのように立ち向かいますか？

**盾**が大事です。自分を守るために必要でしょ。自分を守ることを考えて、準備してください。どのように準備しますか？

「いつも心のある部分で神様のことを考える」です。

**執着によって出る問題点**

執着のことを考えてください。我々の大きな問題は執着ですね。執着とは何ですか？

最初の段階は、あるものをとても好きになる。

→　次にそれを愛します。

→　次にそれ以外に何も考えない、他のことを考えるのがあまり好きでなはなくなる。

→　愛の中心がそれになる。

それが執着のひとつの印です。　対象は人だけではなく、車、家、ペット、服などになることもありますね。例えばすべての自分の感情の中心がペットになる。これが執着です。

執着が出た結果、

**・その執着の対象から離れると、とても心が痛い。**

**・とても利己的になる**

もし執着の対象が人であると、その人をコントロールしたい、またコントロールされたいと考えます。それは1つの真理です。その結果で自由がなくなります。

とても利己的になる。そして他の人のことをあまり考えなくなります。まずその人のことを考える、食事や他のことなんでも。その後で他の人のことを考えます。

**・狭くなる**

例えば恋人に「こうしてほしい」と願っても、恋人がその通りにしないと心が痛みます。自分に自由がいりませんし、相手を自由にしたくない。その恋人に反発されると心が痛む。

子供が成長して、自由な意見を持つようになると、お母さん、お父さんは「私はこんなに息子のことを愛しているのに息子は私の言うことを聞かない」と心が痛みます。なぜなら子供が大きくなってもお母さん、お父さんは子供をコントロールしたいですから。特にアジアでそのことありますね。アメリカはちょっと違いますが、インドも日本もそうです。もちろん肯定的な面もあります。人間関係がとても親密、それはいいと思います。しかし執着しないで愛することを覚えておいてください。

**・失望する**

「私はこんなに愛しています。その人は私のことを以前はもっと愛してくれていたのに、今はそれほどでもない」、このような失望も人間関係ではふつうにあります。

これらの問題の本当の原因は執着です。内省してください。

そうしますと執着の問題であるという答えが出ます。

**いつも心のある部分で神様を思うことで**

**①執着がなくなり、執着による苦しみ、悲しみがなくなる**

シュリー・ラーマクリシュナの言うことは、これらの執着が原因で、皆さんいろいろとトラブルが出ます。そのことを解決するために神様を思い出してください。神様を思い出しますと、その状態、その問題は出ません。

ある部分で常に神様のことを考える、そして

家族、親せき、ペット、車、**全てのものは神様から与えられたもの**。

そう考えますと絶対執着は出ないです。愛はあっても執着は出ません。

ただの人間関係ではなく、**神様の関係で人間関係を作る**。これが霊的なふるまいです。それを実践しますと、執着は出ないです。

まずは頭で理解するだけで大丈夫です。それから実践してください。

執着がないと、執着の結果で出ていた苦しみや悲しみも出ないです。

**②執着以外から出る苦しみ、悲しみからも守られる**

もうひとつはショック。例えば親戚が亡くなりますととても悲しみ苦しむでしょ。しかしその時に神様のことを思いだしますと、どのように守られますか？

親戚が亡くなったときに、「神様がご自身のもとに取り戻した」と考えます。もうひとつは、「すべてのものは一時的、神様だけが永遠です」、そのことを思い出してください。その感じで苦しみ、悲しみから守られることはできます。

そして心の平安が戻ります。

もし世俗的なことをたくさん考えますと、もっと執着が出ます。そしてもっともっと束縛が出ます。もっと束縛が出ますと、もっと苦しみ、悲しみが出ます。

しかし神様への思いを増やしますともっと幸せ、もっと安心が出ます。

（第33回『福音』勉強会以上）